

街の眺め

内海隆一郎



街の眺め

内海隆一郎



内海隆一郎（うつみ りゅういちろう）

1937年生まれ。一関第一高校，立教大学卒。出版社勤務の後，フリーの編集者を経て現在に至る。

1969年「雪洞にて」で文学界新人賞受賞。

著書に、『金色の棺』（筑摩書房），『人びとの忘れもの』（筑摩書房），『千二百五十日の逃亡』（筑摩書房），『人びとの旅路』（新潮社），『人びとの情景』（PHP研究所）などがある。

街の眺め ^{まちなが}		著者 内海隆一郎		編集人 沢 晶 毅		発行人 川合多喜夫		発所 毎日新聞社		10051 東京都千代田区一ツ橋 530 大阪市北区堂島 802 北九州市小倉北区紺屋町 450 名古屋市中村区名駅		印刷 中央精製 製本 大口製本
----------------------	--	----------	--	-----------	--	-----------	--	----------	--	---	--	--------------------

©Ryuichirou Utsumi 1990 Printed in Japan

ISBN4-620-10405-1

街の眺め
目次

腕時計	44	夏の窓	11
婚礼写真	41	昔の仲間	14
懐かし通り	38	電車で	17
キーワード	35	電話の声	20
宝さがし	32	木々の受難	23
ビオちゃん	29	にがうり棚	26

夕暮れ	80
クモの巣	77
冬じたく	74
小鳥のレストラン	71
朝の光	68
古本屋の棚	65
植木鋏	62
いつもの席	59
秋風	56
落ち葉	53
天気予報	50
同級生	47

ドライブイン小景
83

一人暮らし
86

街角のクロ
89

ぬくもり
92

昔馴染み
95

海老天の尻尾
98

巨腹記
101

真夜中の駅
104

黒革の鞆
107

林 檎
110

昼めしどき
113

怖い話
116

ランドセル 119

図書館通い 122

眼鏡を買いに 125

眼下の家 128

休んだ日に 131

ひそかな祈り 134

独り言 137

鶏のいる庭 140

淋しい犬 143

散髪日和 146

取り柄 149

モーニング 152

親 友	休み 明け	毎度 どうも	古 巣	自 転車	日 傘	赤 電話	朝 顔	み ようが 畑	夕 立	犬 の鎖	黄 色い 兎
188	185	182	179	176	173	170	167	164	161	158	155

お見合い 191

子猫 194

塀の上 197

指輪 200

青いスニーカー 203

裏の家 206

屋上の片隅で 209

困った話 212

古い写真 215

読書好き 218

あとがき 221

裝幀
長友啓典

街の眺め

夏の窓

夏になると、ダイニングキッチンの小窓に、きまつて一匹のヤモリが来る。夜、屋内に電灯がともるところ、窓ガラスの外側に体長六センチほどの小柄なのが張りついている。

現れるとすぐに分かるのは、窓の下にテレビがあるからだ。テレビを観ている誰かが、声をあげて家族に知らせる。

「来てるよ。ほら、ヤモリが今年も来た」

夫婦と娘二人の家族は、そろって窓を見つめる。視線を意識するわけではないだろうが、ヤモリはガラス越しに細く軟らかそうな腹部や四肢を見せながら、長い尾をゆらして、ことさら優美にくねくねと動きまわる。

八十センチ四方の窓は、彼の狩り場である。屋内の明かりを受けたガラスに、小さな羽虫が集まる。それがお目あてなのである。

羽虫をねらって窓の隅から走り寄り、一センチほど手前で静止してから、すばやく飛びかかる。しかし、いつも成功するとは限らない。まだ若く未熟なせいか、ねらった羽虫をあと一歩

のところで逃がすこともある。

家族はテレビの画面から目を移して、窓の向こうで繰り返される光景に見とれる。

この狩り場にも、危険がないわけではない。誰かが彼の存在を忘れて、いきなり窓を開けてしまうことがある。一度などは、勢いよく開け放った窓枠に直撃されて、危うく押しつぶされそうになった。かろうじて助かったのは、窓の滑りが悪かったためである。

もう一つの危険は、ライバルである。体長十センチを越す別のヤモリが、ときどき狩り場に闖入する。どこかの窓の、自分の狩り場に明かりがともらないかどうかして、遠征してくるのだらう。太い胴体をゆすって、わがもの顔に彼の狩り場を荒らしまわる。狩りの技も、彼とは比較にならないほど巧みで、ねらった獲物はけっして逃がさない。

彼のほうは、危うく転落しかけながら、すぐすと逃げ出す。

娘たちは悔しがって、屋内の明かりをすべて消してしまう。ガラスを指で弾いて、
「あんたなんか、さっさと行っておしまい」

闖入者が去ったのを見きわめてから明かりをつけると、小柄な彼が恐る恐る帰ってくる。
父親は、娘たちに言う。

「えこひいきしたら可哀そうだよ。大きいほうだって、きつと腹がすいてるんだ」

「いいの。彼は、うちのペットなんだから」

「しかし、あの二匹は親子かもしれないぞ」

「そんなら、なおさらだわ。親が強引に子供の領分を侵すなんて、ぜったい許せない」
娘たちは硬い表情を見せる。窓の向こうの緊張が、こっちに飛び火しそうな雲行きだ。高校を卒業した娘たちは、最近父親に対してひそかに不満を募らせているもようである。

——門限は九時、夜十時以降の電話は厳禁なんて、わたしたちを制約し過ぎるわよ。
この機会に談判しようという姿勢が見えている。

父親は、すかさず窓を指さして、

「もしかすると、親のヤモリは獲物の採り方を教えに来ているのかもしれないぞ」
ちょうど窓の向こうでは、小柄な彼がねらった羽虫にあと一歩まで近づきながら、不甲斐なくも取り逃がしたところである。

「……いくつになっても大人になれずに、とても目が離せない子供のためにさ」
ガラスの向こうで、彼が無念そうに頭をもたげ、羽虫を見送っている。

娘たちも、一緒になって悔しそうに頬をふくらませながら、それを眺めている。

昔の仲間

少年時代の遊び友達が、ほぼ五年に一度、都内で集まって一夕を過ごす。

東北のI市の、小さな街角で罐蹴りや三角ベースの野球をしていた仲間である。

中学を終えて集団就職で上京した六ちゃんが最年長で、左官業。高校を卒業して出てきたシゲちゃんとヒデちゃんは、郵便局員と会社員。それに会社員のリュウ。最年少のトラオは、小学校教師。

会うたびに年をとっていくが、不思議に待ち合わせの場所でも見過ごすことはない。

酒を飲みながら話すことは、少年のころの思い出ばかり。五年前にも十年前にも大笑いしたのに、同じ話でまた笑いこぼる。

ひたすら少年時代をしゃべりつづけ、酔うにしたがって当時へ帰った心持ちになる。

六ちゃんはかつてのボスに戻り、シゲちゃんとヒデちゃんは主戦投手の座を争うライバル同士に、リュウはフライを落としてばかりいる外野手に、トラオは万年補欠のチビに戻る。

とにかく、みんな少年になってしまう。